研究課題名: 共感と評判に基づく援助行動の文化差を生み出す心理機制の解明
研究種目: 若手研究
研究代表者: 京都文教大学 総合社会学部 講師 山本佳祐

（概要）
本研究の第 1 の目的は、「身元のわかる犠牲者効果」（不特定多数の犠牲者に関する統計情報よりも、犠牲者個人の身元がわかる情報が示される方が、援助がなされやすい傾向）にみられる文化差を説明する理論を構築することである。先行研究では、身元のわかる犠牲者効果の文化差についての知見が乏しく、少数の研究間でも一貫した結果が得られていない問題があった。そこで本研究は、文化的自己観の枠組みと集団の所属性に着目して、文化差を説明する新たな理論を提案する。
また、先行研究では身元のわかる犠牲者効果の生起を抑制する方法として、二重過程理論における分析的思考（システム 2）の喚起が有効であると示されているが、同時に全体的な寄付額の水準が低下している問題を抱えている。そこで本研究は第 2 の目的として、意思決定時の熟慮（システム 2）を理性熟慮と共感熟慮の 2 種類に切り分け、このうち共感熟慮が不特定多数の犠牲者に対する援助行動を促進することを明らかにし、文化普遍的な有効性を検討する。

※R6 研究計画書より抜粋